

病害虫発生予察情報

- 1 令和 8 年 度 病害虫発生予察 予報第 6 号 (9 月)
2 気 象 情 報 九州北部地方 1 か月予報 (福岡管区气象台)
気象台メモ (大分地方气象台)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

◎予報内容の概況

作 物	病 害 虫 名	発 生 面 積		発 生 量		掲載ページ
		平 年 比	前 年 比	平 年 比	前 年 比	
水 稲	いもち病 (穂)	やや少ない	平 年 並	平 年 並	前 年 並	P.2
	紋 枯 病	やや少ない	やや少ない	平 年 並	前 年 並	P.3
	トビロウンカ	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	P.4
	斑点米カメムシ類	平 年 並	前 年 並	多 い	多 い	P.5
大 豆	紫 斑 病	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	P.5
	ハスモンヨトウ	平 年 並	多 い	平 年 並	やや多い	P.6
	カメムシ類	平 年 並	やや少ない	やや少ない	やや少ない	P.7
温州ミカン	黒 点 病	平 年 並	前 年 並	平 年 並	多 い	P.8
	ミカンハダニ	平 年 並	多 い	やや多い	多 い	P.8
カボス	かいよう病	平 年 並	やや少ない	やや少ない	やや少ない	P.9
ナシ	黒 星 病	やや少ない	前 年 並	やや少ない	前 年 並	P.9
	ハダニ類	やや多い	少 ない	やや多い	少 ない	P.10
ブドウ	べと病	平 年 並	少 ない	平 年 並	少 ない	P.10
果樹共通	果樹カメムシ類	やや多い	多 い	多 い	多 い	P.11
夏秋トマト	すすかび病	平 年 並	やや多い	やや少ない	前 年 並	-
	灰色かび病	やや少ない	やや少ない	平 年 並	前 年 並	P.12
	うどんこ病	平 年 並	前 年 並	平 年 並	やや少ない	P.13
	コナジラミ類	平 年 並	やや少ない	平 年 並	前 年 並	P.14
	オオタバコガ	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	-
	ハモグリバエ類	やや少ない	やや少ない	やや少ない	やや少ない	-
夏秋ピーマン	トマトキバガ	-	やや少ない	-	前 年 並	P.15
	うどんこ病	やや少ない	少 ない	やや少ない	少 ない	P.16
	斑点病	平 年 並	前 年 並	やや少ない	やや少ない	P.17
	アブラムシ類	平 年 並	やや少ない	平 年 並	やや少ない	P.18
	タバコガ	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	-
白ネギ (平坦地)	アザミウマ類	多 い	前 年 並	多 い	多 い	P.19
	ネギアザミウマ	多 い	やや多い	やや多い	やや少ない	P.20
	ネギハモグリバエ	やや少ない	少 ない	平 年 並	やや少ない	-
白ネギ (中山間地)	シロイチモジヨトウ	やや多い	やや少ない	多 い	多 い	P.21
	ネギアザミウマ	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	-
イチゴ	ネギハモグリバエ	平 年 並	少 ない	平 年 並	前 年 並	-
	うどんこ病	やや多い	少 ない	平 年 並	少 ない	P.22
	炭 疽 病	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	P.22
	ハダニ類	平 年 並	少 ない	やや多い	少 ない	P.23

◎注意事項 上記一覧表病害虫のゴシック体のみ以下に個別の記述をしています。

- ◎特記事項 令和 8 年度病害虫防除技術情報第 6 号 (ピーマン ハダニ類) : 令和 8 年 7 月 21 日
令和 8 年度病害虫防除技術情報第 7 号 (落葉果樹 ハダニ類) : 令和 8 年 7 月 21 日
令和 8 年度病害虫発生予察注意報第 4 号 (ピーマン アザミウマ類) : 令和 8 年 7 月 22 日
令和 8 年度病害虫発生予察注意報第 5 号 (トマト トマトキバガ) : 令和 8 年 7 月 22 日
令和 8 年度病害虫防除技術情報第 8 号 (夏期における白ネギ害虫防除) : 令和 8 年 7 月 29 日
令和 8 年度病害虫発生予察注意報第 6 号 (果樹全般 果樹カメムシ類) : 令和 8 年 8 月 5 日
令和 8 年度病害虫発生予察注意報第 7 号 (水稻 斑点米カメムシ類) : 令和 8 年 8 月 7 日
令和 8 年度病害虫発生予察注意報第 8 号 (ネギ シロイチモジヨトウ) : 令和 8 年 8 月 18 日
令和 8 年度病害虫防除技術情報第 9 号 (ピーマン タバコガ類) : 令和 8 年 8 月 27 日

水稻

1 いもち病（穂いもち）

（１）予報内容

発生時期：平年並（出穂期以降）

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

（２）予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低く、発病度は平年並であった。

＜普通期水稻における葉いもち発生状況＞

発生圃場率： 27.5%（平年：34.7%、前年：25.0%）

発病度： 3.2（平年：3.2、前年：1.6）

イ 豊後大野市三重町赤嶺に設置している予察田における葉いもちの発生は、8月25日現在認められた。ヒノヒカリでは発病株率、発病度ともに平年より低く、なつほのかでは発生株率は前年よりやや高く、発病度は前年並であった。

ヒノヒカリ

発生株率： 6.0%（平年：31.9%）

発病度： 1.0（平年：16.8）

なつほのか

発生株率： 2.0%（前年：0%）

発病度： 0（前年：0）

ウ 8月1日～8月25日における BLASTAM による各アメダス観測地点での葉いもち感染好適条件の発生は以下のとおりであった。

院内	なし	竹田	8/12
日田	なし	佐伯	なし
玖珠	8/15	宇目	8/14

エ 本病は冷涼、多湿条件が発病に好適であるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は低い確率10%、平年並20%、降水量は平年並40%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

オ 水稻いもち病防除に対する FRAC コード「11」（QoI 剤）については、令和4年度に本剤耐性菌の発生が確認されているため、引き続き耐性菌の再発や拡散を防ぐことが重要である。そこで、やむを得ず水稻（WCS も含む）に使用する場合は、「水稻に QoI 剤を使用する場合の対応マニュアル（平成28年11月10日付地域農業振興課、JA 全農おおいの公表（URL: https://www.pref.oita.jp/uploaded/life/2213301_4504493_misc.pdf））」に準じた使用を行う。

（３）防除上注意すべき事項

ア 穂いもちの防除は、穂ばらみ期と穂揃期の液剤または粉剤による2回散布、あるいは、出穂約2週間前の粒剤施用と穂揃期の液剤または粉剤散布を基本とする。出穂期を見極め、防除適期を失しないよう注意する。出穂後に天候不良が続く場合は、穂揃期の防除後7日～10日後にさらに追加防除も検討する。

イ 葉いもちの少ない圃場においても、出穂後に穂いもちが発生する可能性がある。このため、現在葉いもちの発生が少ない圃場でも注意する必要がある。

2 紋枯病

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率、発病度ともに平年より低かった。

＜普通期水稻における発生状況＞

発生圃場率： 0%（平年：11.0 %、前年：10.0%）

発病度： 0 （平年： 0.7 、前年： 0.3 ）

イ 予察田における紋枯病の発病株率は、8月25日現在、ヒノヒカリで4.0%（平年4.4%）、なつほのかで2.0%（前年20.0%）、つや姫で0%（平年6.2%）と平年より低い。

ウ 本病は高温多湿条件の時に発病が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

エ 水田農業グループの作柄判定試験では8月5日現在、6月19日移植ヒノヒカリで茎数は前年比106%、平均比120%となっている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 過繁茂等で本病の後期進展が予想される圃場では防除を徹底する。

3 トビイロウンカ（令和 8 年 7 月 13 日 病害虫防除技術情報 第 5 号発表）

（1）予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 8 月中旬の巡回調査では、幼虫の発生が確認されたが、発生圃場率、株当たり虫数ともに平年より低かった。

＜普通期水稻における発生状況＞

発生圃場率： 0%（平年：2.5%、前年：0 %）

株当たり虫数： 0.0 頭（平年：0.1 頭、前年：0 頭）

イ 予察灯においては 8 月 24 日現在、誘殺は確認されていない（平年誘殺日：7 月 24 日）。

ウ 予察田における 8 月 25 日調査で、成虫及び幼虫は確認されなかった。

株当たり虫数：0 頭（平年：52.6 頭、前年：0 頭）

エ 本虫は海外飛来性害虫であり、梅雨前線の影響で飛来が増加する傾向があるが、本年の梅雨明けは 7 月 8 日で平年（7 月 19 日）より 11 日早かった。

オ 本虫は高温、少雨により発生が助長されるが、猛暑時には発育が抑制される。向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は平年並 20%、高い確率 70%、降水量は少ない確率 40%、平年並 40%と予想されている（気象予報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 本虫は株元に生息するので、薬剤が株元に到達するように注意する。また、畦畔よりも水田の中央部に発生しやすいので水田内をよく確認する。

イ 現在発生が少ない圃場でも今後の気象条件によっては増加する可能性があるため、圃場での発生状況を確認し、短翅型雌成虫が 10 株当たり 2 頭以上を超える場合は直ちに防除を行う。

ウ 坪枯れが発生した圃場では可能な限り収穫を早めて、倒伏に伴う減収を防ぐ。収穫までに期間がある場合は、薬剤の収穫前日数に注意しつつ、早急に防除を行う。なお、坪枯れが発生した圃場の場合、坪枯れを起こしている周辺に本虫が密集しているので、特に留意する。

エ 防除を実施しても密度が低下しにくい場合もあるので、9 月下旬まで注意を怠らないようにする。また、栽培期間の長い晩生品種、もち品種、新規需要米等は被害が拡大する傾向があるので発生状況を確認する。

4 斑点米カメムシ類（令和8年8月7日 病虫害発生予察注意報 第7号発表）

（1）予報内容

発生面積：平年並

発生量：多い

（2）予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、調査を行った40圃場で斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ）は確認されなかった。

イ 8月3日～8月5日の畦畔におけるすくい取り調査では、斑点米カメムシ類（ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ類、ミナミアオカメムシ）は平年より多かった。

＜調査地点あたり総捕獲数＞

成虫：6.3頭（平年：3.5頭、前年：4.6頭）

幼虫：1.9頭（平年：0.9頭、前年：1.8頭）

ウ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は平年並20%、高い確率70%、降水量は少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 穂揃期に枝梗いもち、ウンカ類との同時防除として広域で一斉に行う。

イ 発生の多い圃場では、穂揃期とその7～10日後の2回散布を行う。

ウ 周辺雑草の除去は成虫の飛来防止に有効であるが、飛び込み防止の観点から出穂直前・直後の除草は控える。

エ イネカメムシは出穂前から圃場に侵入するので、本種の発生が確認されている地域では、防除効果が高い出穂直後に1回目の農薬散布を行い、その7～10日後に2回目の散布を行う。また、周辺の圃場より出穂が早いイネに多発している場合があるので、圃場をよく観察し防除を徹底する。

大豆

1 紫斑病

（1）予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 本病は若莢期に降雨日が続いた場合に発生が助長される（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 幼莢期から子実肥大期にかけて2回、着莢部に薬剤が十分付着するように防除を実施する。

イ FRACコード「1」（ベンゾイミダゾール系薬剤）の効果が低かった圃場では、耐性菌が疑われるため他系統薬剤を使用する。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、9圃場すべてで発生が確認され、発生圃場率、食害度ともに平年より高かった。

発生圃場率：100%（平年：52.6%、前年：0%）

食害度：5.1（平年：3.6、前年：0）

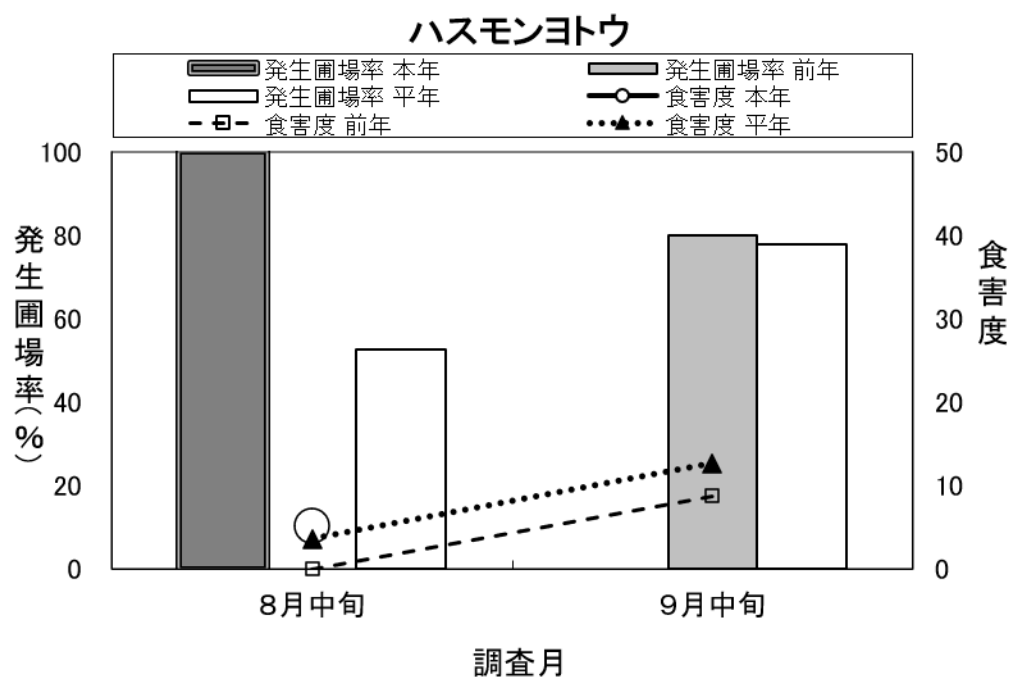
イ 農業研究部に設置しているフェロモントラップの誘殺数は、8月1～4半旬は5頭で平年（142.7頭）より少ない。また8月25日調査では、予察圃場においてハスモンヨトウの食害が確認された。

ウ 本虫は高温、少雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は平年並20%、高い確率70%、降水量は少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ふ化直後の幼虫は葉裏に集合して加害するため初期発生に注意し、分散前の幼虫が群生する葉（白変葉）を認めたら、早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫には薬剤防除効果が十分でないため、薬剤散布にあたっては圃場の見回りを行い、若齢幼虫期に薬剤防除を行う。



3 カメムシ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生は確認されず、発生圃場率、株当たり虫数ともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年：15.0%、前年：10.0 %）

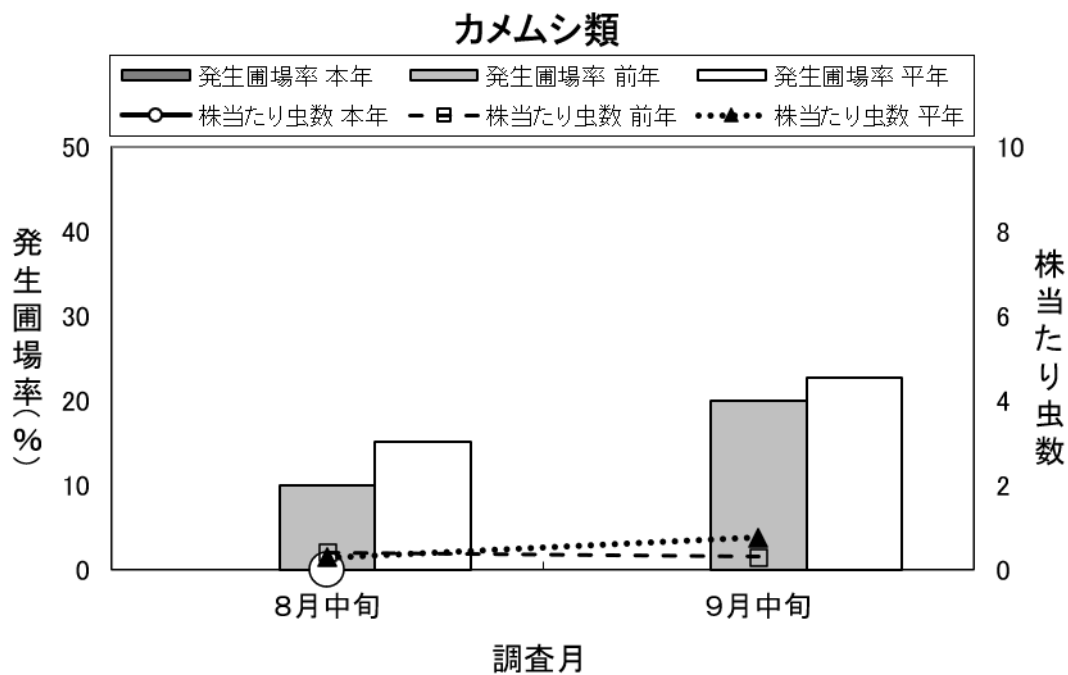
株当たり虫数：0頭（平年：0.3頭、前年：0.4頭）

イ 本虫は高温、少雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は平年並20%、高い確率70%、降水量は少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 大豆を加害するカメムシ類は加害期間が長いので、幼莢期から子実肥大期にかけて2回防除を徹底する。なお、着莢部に薬剤が十分付着するように散布する。

イ ミナミアオカメムシは、他のカメムシ類と比較して増殖能力が高く、薬剤に対する感受性が低いいため適切な薬剤を選定する。



カンキツ（温州ミカン）

1 黒点病

（１） 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

（２） 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低く、平均発病果率、平均発病度は平年より高かった。

発生圃場率：30.0%（平年 43.3%、前年 33.3%）

平均発病果率：23.8%（平年 8.4%、前年 5.7%）

平均発病度：8.8（平年 2.2、前年 3.2）

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

（３） 防除上注意すべき事項

ア 9月以降の降雨が多い場合は多発することがあるので、状況に応じて収穫前日数および使用回数に注意し、防除を実施する。

イ 伝染源である枯枝の剪除徹底に努める。

2 ミカンハダニ

（１） 予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや多い

（２） 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低く、平均寄生葉率は平年並であった。

発生圃場率：30.0%（平年 41.0%、前年 20.0%）

平均寄生葉率：7.9%（平年 8.9%、前年 1.5%）

イ 本虫は高温乾燥により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

（３） 防除上注意すべき事項

ア 発生に注意し、初期防除を徹底する。

イ 抵抗性の発達を回避するため、IRACコード表を参照し、同一系統薬剤は年1回の使用とする。

カンキツ（カボス）

1 かいよう病

（1）予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや少ない

（2）予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、葉の発生圃場率は平年よりやや低く、平均発病葉率、平均発病度は平年より低かった。果実では、発生圃場率は平年より高く、平均発病果率は平年よりやや低く、平均発病度は低かった。

（葉） 発生圃場率：11.1%（平年 15.6%、前年 11.1%）

平均発病葉率：1.0%（平年 2.4%、前年 0.6%）

平均発病度：0.2（平年 0.7、前年 0.4）

（果実）発生圃場率：22.2%（平年 16.7%、前年 44.4%）

平均発病果率：2.0%（平年 2.8%、前年 5.7%）

平均発病度：0.4（平年 1.0、前年 1.3）

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝葉や罹病果実の除去を徹底する。

ナシ

1 黒星病

（1）予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

（2）予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生は確認されず、発生圃場率、平均発病葉率、平均発病果率ともに平年より低かった。

（葉）発生圃場率：0%（平年 2.6%、前年 0%）

平均発病葉率：0%（平年 0.1%、前年 0%）

（果実）発生圃場率：0%（平年 1.3%、前年 0%）

平均発病果率：0%（平年 0.0%、前年 0%）

イ 本病はやや低温・降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、低い確率10%、平年並20%、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている（気象予報参照）

（3）防除上注意すべき事項

ア 豊水は本病に弱いので予防散布を徹底する。特に無袋栽培では収穫前の果実での発病に注意する。

2 ハダニ類（令和 8 年 7 月 21 日 病虫害防除技術情報 第 7 号発表）

（1）予報内容

発生面積：やや多い

発生量：やや多い

（2）予報根拠

ア 8 月中旬の巡回調査では、発生は確認されず、発生圃場率、平均寄生葉率は平年より低かった。
しかし、8 圃場中 7 圃場で死虫が多く確認された。

発生圃場率：0%（平年 32.9%、前年 37.5%）

平均寄生葉率：0%（平年 9.8%、前年 0.2%）

イ 本虫は高温乾燥により発生が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 40%、高い確率 70%、降水量は、少ない確率 40%、平年並 40%と予想されている（気象予報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 発生に注意し、初期防除を徹底する。

イ 抵抗性の発達を回避するため、IRAC コード表を参照し、同一系統薬剤は年 1 回の使用とする。

ブドウ

1 ベと病

（1）予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 8 月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均発病葉率ともに平年より低かった。

発生圃場率：25.0%（平年 48.9%、前年 62.5%）

平均発病葉率：1.3%（平年 8.0%、前年 11.2%）

イ 本病は低温・降雨により発生が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は、低い確率 10%、平年並 20%、降水量は、平年並 40%、多い確率 20%と予想されている（気象予報参照）

（3）防除上注意すべき事項

ア 発病すると防除が困難となるので、予防散布を徹底する。特に台風前後は防除に努める。

果樹共通

1 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

（令和 8 年 8 月 5 日 病害虫発生予察注意報 第 6 号発表）

（1）予報内容

発生面積：やや多い

発生量：多い

（2）予報根拠

ア 各地点のフェロモントラップにおける誘殺数は平年並～平年より多く推移している。

イ 本虫は高温条件で飛来が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%と予想されている（気象予報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の園内への飛来は地域や園地により大きく異なるので、園内外をこまめに見回り早期発見に努める。

イ 薬剤散布はカメムシ類が園地に飛来する夕暮れ時に行うと効果的であり、地域全体での一斉防除はより効果的である。

ウ 殺虫剤の多用は天敵等への影響が大きくハダニ類の発生を助長するので、最小限の使用にとどめる。

夏秋トマト

1 灰色かび病

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生は確認されず、発生圃場率、平均発病葉率ともに平年より低かった。

発生圃場率： 0%（平年 11.3%、前年 10.0%）

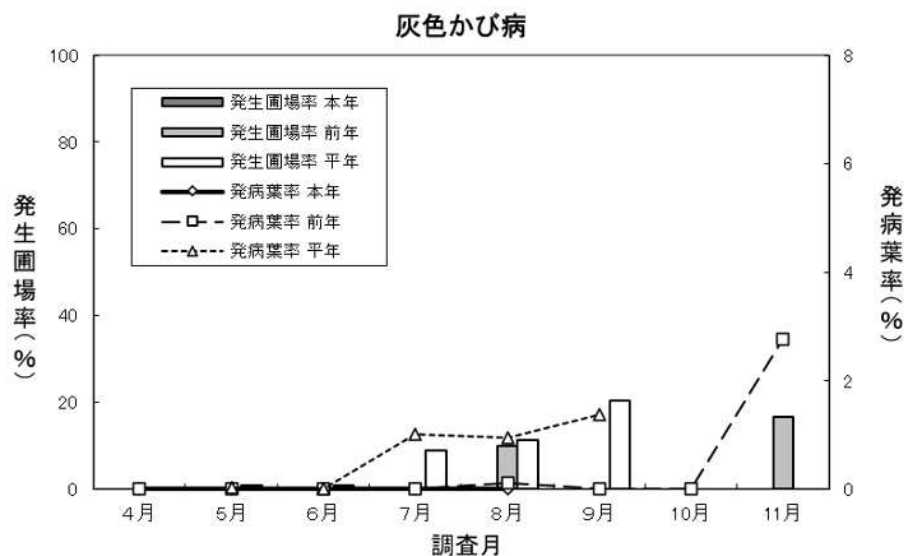
平均発病葉率： 0%（平年 0.9%、前年 0.1%）

イ 本病は低温多湿条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、低い確率 10%、平年並 20%、降水量は、平年並 40%、多い確率 20%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉先枯や花卉の残渣は発生源となるので早めに除去する。また、過繁茂、排水不良は病勢の進展を助長するので、下葉のつみ取り等を行って圃場内の通風を良くし、初期防除を徹底する。

イ 本病は薬剤耐性菌を生じやすいので、FRAC コード表を参照し、同一系統薬剤の連続使用を避け、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を行う。



2 うどんこ病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並、平均発病葉率は平年より低かった。

発生圃場率：30.0%（平年 32.9%、前年 40.0%）

平均発病葉率：1.6%（平年 7.6%、前年 11.4%）

イ 本病は乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

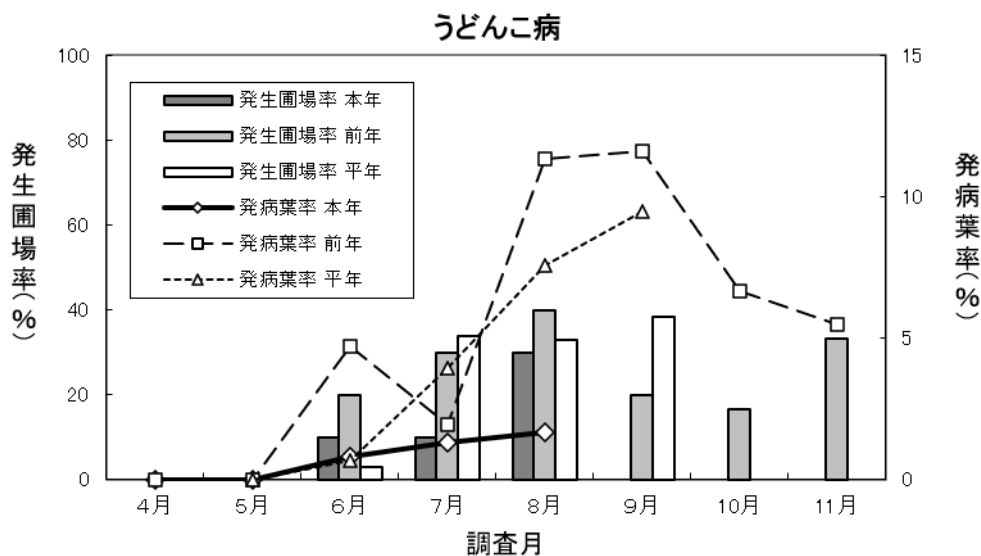
(3) 防除上注意すべき事項

ア 一旦発生すると防除が困難になるので早期発見に努め、防除は予防散布や初期散布に重点を置くとともに葉裏にも十分薬剤がかかるようにする。

イ 発病初期のうちに治療効果の高い薬剤を中心に、散布間隔を短くするなどして集中的に散布する。

ウ 発病葉は伝染源となるのでこまめに除去し、圃場外に持ち出して処分する。

エ FRACコード「3」（EBI系薬剤）は連用すると耐性菌を生じやすいので、FRACコード表を参照して、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。



3 コナジラミ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低く、平均株当虫数は平年並であった。

発生圃場率：10.0%（平年 24.5%、前年 40.0%）

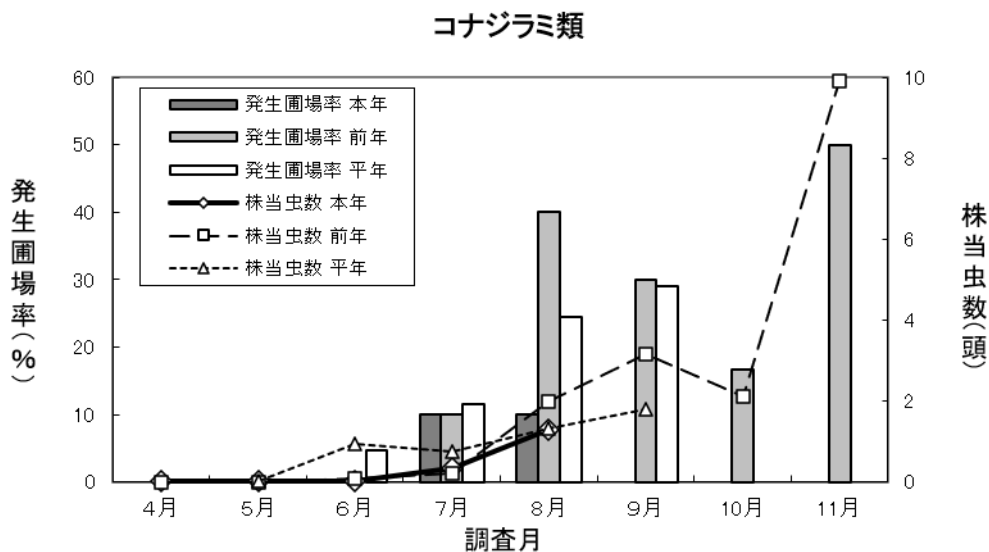
平均株当虫数：1.3頭（平年 1.3頭、前年 2.0頭）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%、降水量は、少ない確率 40%、平年並 40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は葉裏に寄生して吸汁加害し繁殖も旺盛なため、早期発見に努め低密度のうちに防除を行う。

イ タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）を、またコナジラミ類はトマトクロシスウイルス（ToCV）を媒介するため、薬剤散布を徹底する。



4 トマトキバガ（令和8年7月22日 令和8年度病害虫発生予察注意報 第5号発表）

（1）予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：前年並

（2）予報根拠

ア 8月上旬期のトマトキバガフェロモントラップ調査では、1地点当たりの誘殺数は前年より少なかった。7月末時点のトマトキバガ食害調査では、累計食害戸数はやや少なかった。

平均誘殺数（合計）：35.4頭（前年：103.6頭、前々年：18.1頭）

イ 7月末時点のトマトキバガ食害調査では、累計27戸で葉への被害が確認された。

食害戸数（累計）：27戸（前年：43戸、前々年：14戸）

（3）防除上注意すべき事項

ア 一斉防除の効果が高いので、産地の防除暦等を活用して地域ぐるみで防除を行う。

イ 圃場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。

ウ 被害葉や被害果は圃場内から持ち出すとともに、野外に放置せずに速やかに適切に処分する。

エ 県内ではトマト、ミニトマト及びナスで発生が確認されている。海外では、タバコ、バレイショ、ホオズキ等のナス科作物やマメ科のインゲンマメも寄主植物として確認されている。

オ 本虫と類似するハモグリバエの食害痕は、葉裏からは確認できない。一方、本虫による食害痕は葉裏側からも透けて確認できる。

1 うどんこ病

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均発病度ともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年：32.6%、前年：44.4%）

平均発病度：0（平年：3.3、前年：12.2）

イ 本病は乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 一旦発生すると防除が困難になるので早期発見に努め、防除は予防散布や初期散布に重点を置くとともに葉裏に十分薬剤がかかるようにする。施設栽培では硫黄粉剤を株間散布し予防に努める。

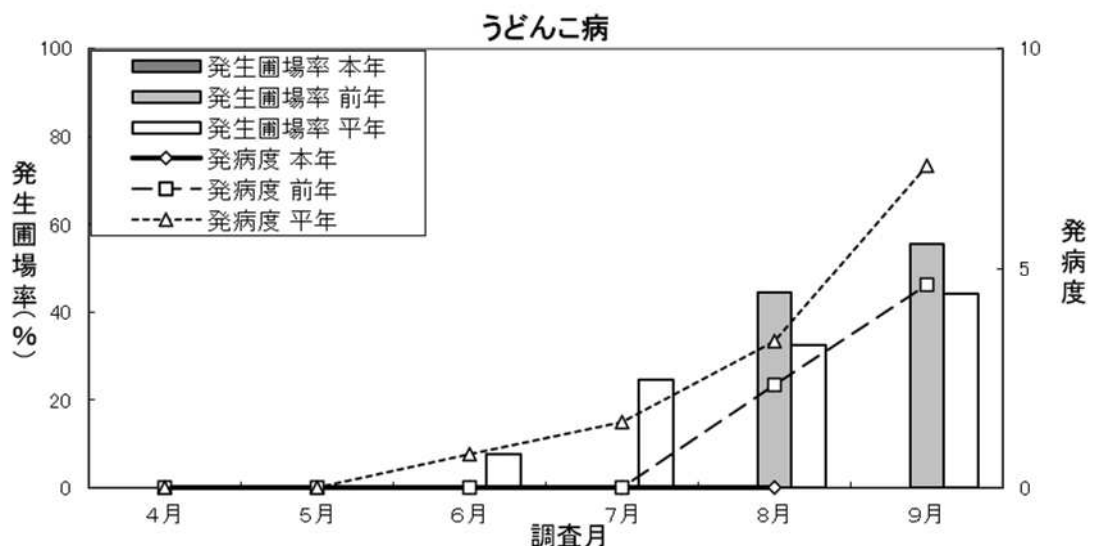
イ 8月下旬から9月にかけて急速に蔓延することがあるので、この時期の発生に注意する。

ウ 発病初期のうちに治療効果の高い薬剤を中心に、散布間隔を短くするなどして集中的に散布する。

エ 発病葉や発病して落葉した葉はなるべくこまめに除去し、処分する。

オ FRACコード「3」（EBI系薬剤）は連用すると耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。

カ 空気の流れが停滞し、乾燥した状態で発生しやすいので、施設内では換気を図るとともに過乾燥を避ける。



2 斑点病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高く、平均発病葉率は平年より低かった。

発生圃場率：44.4%（平年：28.1%、前年：55.6%）

平均発病葉率：2.2%（平年：4.6%、前年：12.2%）

イ 本病は多湿条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

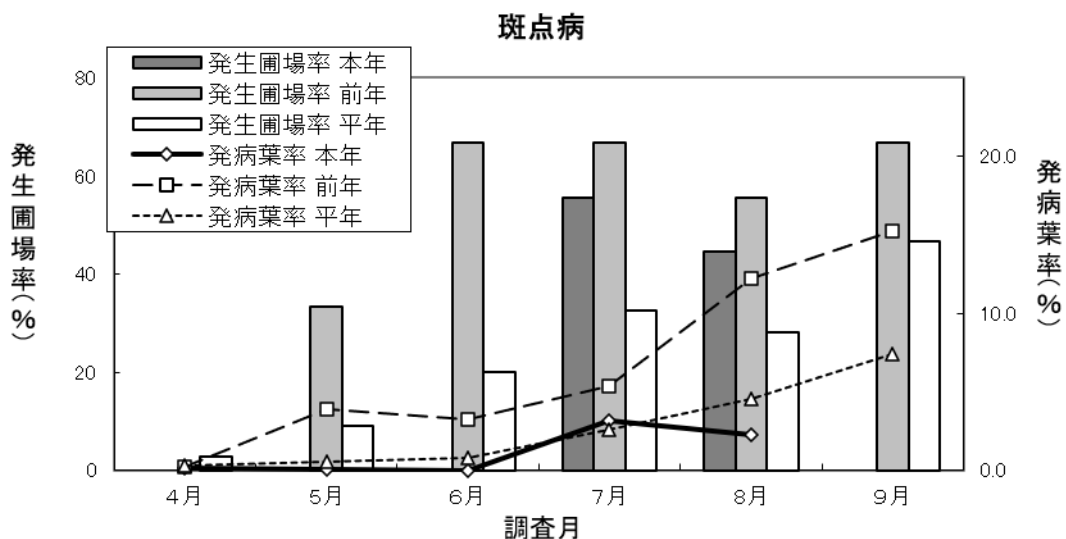
ア 一旦発生すると防除が困難になるので早期発見に努め、防除は予防散布や初期散布に重点を置くとともに葉裏に十分薬剤がかかるようにする。

イ 発病初期のうちに治療効果の高い薬剤を中心に、散布間隔を短くするなどして集中的に散布する。

ウ 高湿度が発生を助長するので施設では換気に努める。

エ 本病の被害により落葉した葉はできるだけこまめに圃場外へ持ち出して処分する。

オ 窒素不足等により株の樹勢が低下すると発病を助長するため、肥培管理に注意し、樹勢を維持するように心がける。



3 アブラムシ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高く、平均50芯虫数は平年よりやや高かった。

発生圃場率：22.2%（平年：9.2%、前年：33.3%）

平均50芯虫数：2.8頭（平年：2.1頭、前年：6.6頭）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

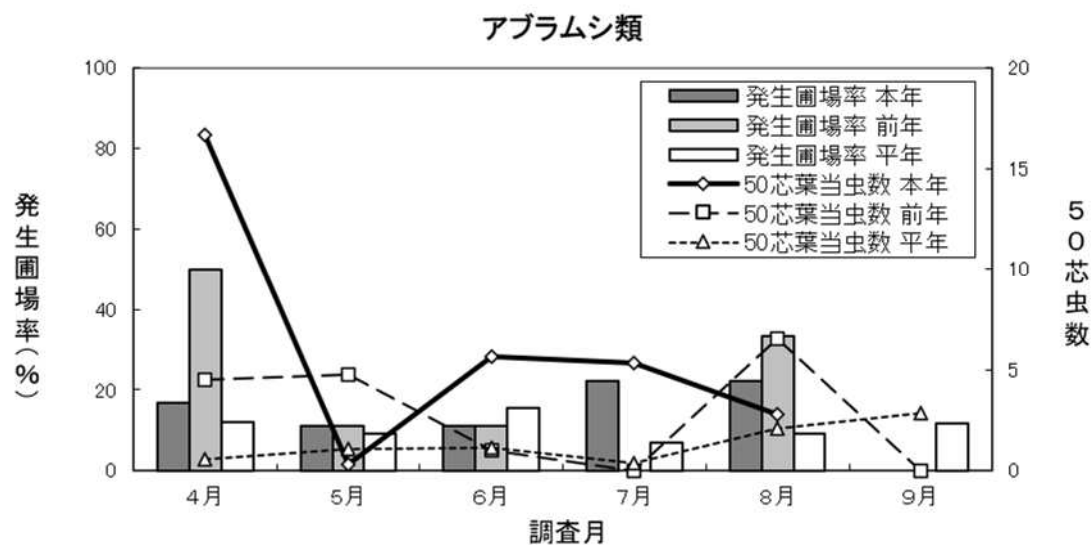
ア 本虫の成育は速く、急速に密度が高まる。また、高密度になると排泄物にすす病が発生し、果実が汚れるため低密度のうちに防除を行う。

イ 成幼虫は新芽、花卉等を吸汁加害し繁殖も旺盛なため、早期発見に努める。

ウ ワタアブラムシは、IRACコード「4A」（ネオニコチノイド系薬剤）に対して感受性の低下が確認されている。

エ IRACコード表を参照して、同一系統薬剤を連続使用しないようにし、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を行う。

オ 本虫は、モザイク病（CMV、PVY、BBWV）を媒介するので発生に注意し、初期防除を徹底する。



4 アザミウマ類 (令和8年7月22日 病害虫発生予察注意報 第4号 発表)

(1) 予報内容

発生面積：多い

発生量：多い

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均寄生花率ともに平年より高かった。

発生圃場率：88.9% (平年：53.5%、前年：88.9%)

平均寄生花率：62.2% (平年：19.7%、前年：54.2%)

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている(気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

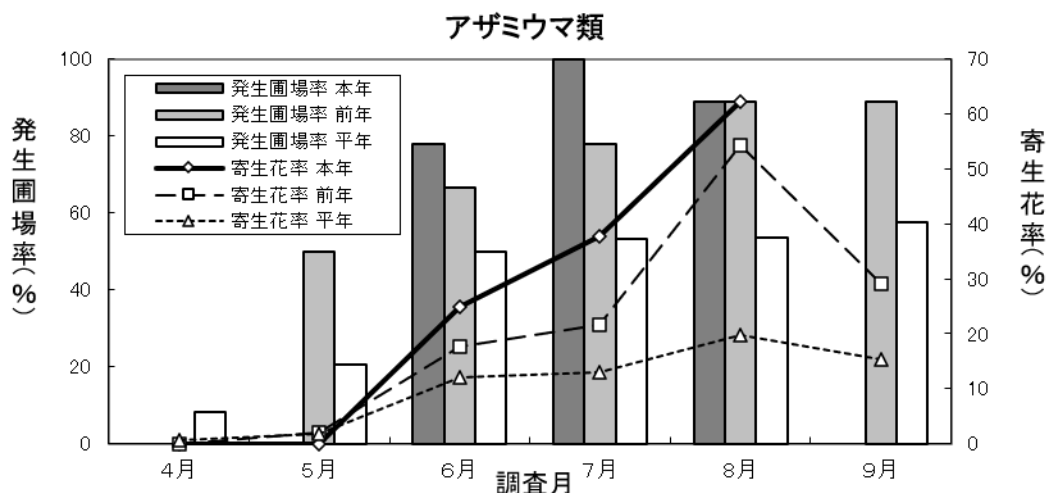
ア 本虫は葉裏、花卉、がくの内側等に潜み繁殖も旺盛なため、早期発見に努め低密度のうちに薬剤が植物体に十分かかるように防除を行う。

イ 本虫は多種の雑草にも寄生し増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

ウ 本虫は青色に誘引されるため、青色粘着トラップ等を設置し、発生状況の把握に努める。

エ ミカンキイロアザミウマは各種薬剤の感受性が低下しており、トマト黄化えそウイルス(TSWV)及びキク茎えそウイルス(CSNV)を媒介するので発生に注意し、初期防除を徹底する。

オ ヒラズハナアザミウマは各種薬剤の感受性が低下しており、トマト黄化えそウイルス(TSWV)を媒介するので発生に注意し初期防除を徹底する。



白ネギ（平坦地）

1 ネギアザミウマ（令和 8 年 7 月 29 日 病害虫発生予察技術情報 第 8 号発表）

（1）予報内容

発生面積：多い

発生量：やや多い

（2）予報根拠

ア 8 月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高く、平均被害度は平年より高かった。

発生圃場率：87.5 %（平年：62.9%、前年：100%）

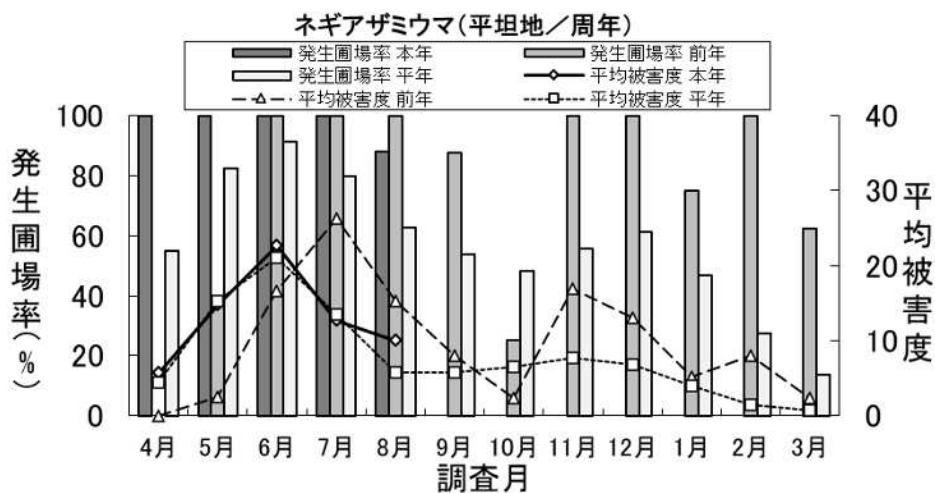
平均被害度：10.0（平年：5.7、前年：15.2）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%、降水量は、少ない確率 40%、平年並 40%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 周辺雑草が発生源となりやすいので、圃場内外の除草を徹底する。

イ 本虫の増殖力は高く、寄生密度が上昇してからでは防除が困難となるので、早期発見に努め防除を行う。



2 シロイチモジヨトウ（令和 8 年 8 月 18 日 病害虫発生予察注意報 第 8 号発表）

（1）予報内容

発生面積：やや多い

発生量：多い

（2）予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では発生圃場率は平年よりやや低く、平均被害葉率は平年より高かった。

発生圃場率：50.0%（平年：69.6%、前年：62.5%）

平均被害葉率：11.6%（平年：6.8%、前年：3.8%）

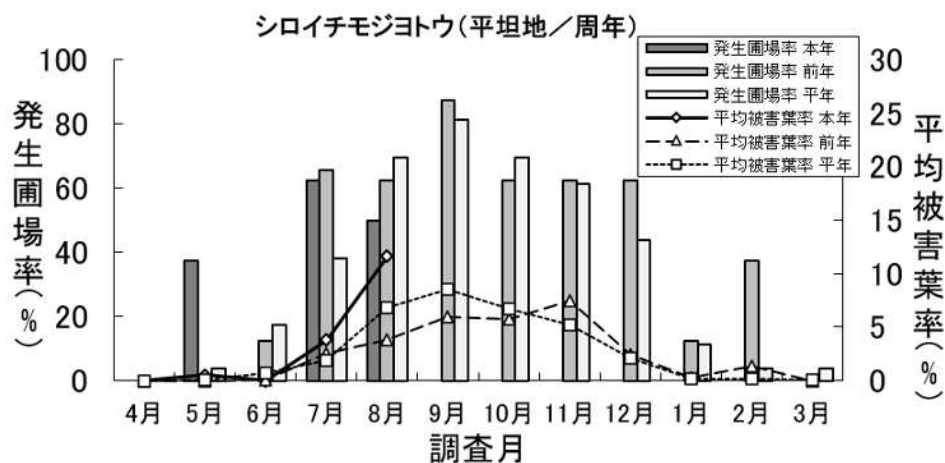
イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 本虫は成長に伴って防除効果が低下するため、早期発見に努め防除を行う。

イ 本虫は薬剤に対する抵抗性を獲得しやすいため、IRACコード表を参照して、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。

ウ 一部地域の個体群でIRACコード「28」（ジアミド系薬剤）、IRACコード「15」（フルフェノクスロン）およびIRACコード「18」（クロマフェノジド）に対する感受性の低下が確認されたため、散布後に防除効果の低下が見られる場合は使用を控える。



イチゴ

1 うどんこ病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高く、平均発病株率は平年よりやや少なかった。

発生圃場率：10.0%（平年：7.4%、前年：30.0%）

平均発病株率：0.8%（平年：1.3%、前年：5.2%）

イ 本病は20～25℃程度が発生しやすいが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 初め葉裏に発生しやすいので注意し、早期発見に努める。

イ 発病初期のうちに治療効果の高い薬剤を中心に、散布間隔を短くするなどして集中的に散布する。

ウ FRACコード「3」（EBI系薬剤）やFRACコード「11」（QoI剤）は連用すると耐性菌を生じやすいので、FRACコード表を参照して、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。

エ 本圃に持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する。

2 炭疽病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では発生は確認されず、発生圃場率、平均発病株率ともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年：3.6%、前年：0%）

平均発病株率：0%（平年：0.5%、前年：0%）

イ 本病は、高温条件で発病が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗をよく観察し、本病に特徴的な葉や葉柄の病斑の早期発見に努め、発病株は周辺の株も含めて圃場外に埋設するなどして処分する。

イ 水はねで伝染するため、育苗期は雨よけ栽培と全面マルチに努める。

ウ 頭上灌水やスプリンクラーは避け、灌水チューブを裏面にして直接葉に水がかからないように注意する。手灌水の場合は、水压を低くして病原菌が飛散しないようにする。

エ 一部地域ではFRACコード「11」（QoI剤）およびFRACコード「1」（ベンゾイミダゾール系薬剤）に対する感受性の低下が確認されたため、散布後に防除効果の低下が見られる場合は使用を控える。

3 ハダニ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや少なく、平均寄生株率は平年より低かった。

発生圃場率：20.0%（平年：32.2%、前年：40.0%）

平均寄生株率：2.0%（平年：7.8%、前年：5.2%）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫の増殖力は高く、寄生密度が上昇してからでは防除が困難であるので、早期発見に努め、葉裏を中心に防除を行う。

イ 本虫は薬剤抵抗性が発達しているため、薬剤散布後に防除効果の低下が見られる場合は使用を控えるとともに、天敵（カブリダニ類）の導入を検討する。

ウ 殺虫剤による苗の灌注処理を実施し、本圃への持ち込みを防ぐ。

※ 薬剤の詳細は大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針、又は各地区防除暦を参照する

気象台メモ

大分地方気象台

◎ 九州北部地方（山口県を含む）1か月予報（福岡管区気象台発表）

- ・ 発表：令和8年8月20日（毎週木曜日に発表）
- ・ 予報期間：令和8年8月22日～令和8年9月21日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

平均気温は、高い確率 70%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに 40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに 40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率が 80%です。2週目は、高い確率が 70%です。3～4週目は、高い確率 60%です。

【向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）】

要素	予報対象地域	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	九州北部地方（山口県を含む）	10	20	70
降水量	九州北部地方（山口県を含む）	40	40	20
日照時間	九州北部地方（山口県を含む）	20	40	40

◎ 九州北部地方（山口県を含む）3か月予報（福岡管区気象台発表）

- ・ 発表：令和8年8月25日
- ・ 予報期間：令和8年9月～令和8年11月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平均気温は、高い確率 50%です。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、高い確率 50%です。

10月 天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率 50%です。

11月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、高い確率 50%です。

降水量は、平年並または多い確率ともに 40%です。

【向こう3か月の気温、降水量の各階級】

3か月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並
9月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並
10月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並
11月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並が多い

【向こう3か月の気温の各階級の確率（%）】

気温	予報対象地域	低い	平年並	高い
3か月	九州北部地方（山口県を含む）	10	40	50
9月	九州北部地方（山口県を含む）	20	30	50
10月	九州北部地方（山口県を含む）	20	30	50
11月	九州北部地方（山口県を含む）	20	30	50

【向こう3か月の降水量の各階級の確率（%）】

降水量	予報対象地域	少ない	平年並	多い
3か月	九州北部地方（山口県を含む）	30	30	40
9月	九州北部地方（山口県を含む）	40	30	30
10月	九州北部地方（山口県を含む）	30	40	30
11月	九州北部地方（山口県を含む）	20	40	40

◎ 最近 1 か月の天候経過（令和 8 年 7 月下旬から令和 8 年 8 月中旬の天候）

7 月下旬（高温）（少雨）（多照）

天気は、高気圧に覆われて晴れる日が多かった。気温は、平年よりかなり高かった（高温）。降水量は、平年よりかなり少なかった（少雨）。日照時間は、平年よりかなり多かった（多照）。

22 日は豊後高田、27 日は国見で「日最低気温の高い方から」の 7 月の 1 位の値を更新した。

25 日は湯布院、26 日は杵築、27 日は国見、28 日は竹田で「日最高気温の高い方から」の 7 月の 1 位の値を更新した。

27 日は日田、豊後高田、28 日は宇目で「日最高気温の高い方から」の通年の 1 位の値を更新した。

※大分市の旬平均気温は 31.1℃で平年よりかなり高かった。旬降水量は 0.0 ミリで平年よりかなり少なかった。旬日照時間は 109.3 時間で平年よりかなり多かった。

8 月上旬（高温）

天気は、前半は高気圧に覆われ晴れる日が多かったが、後半は湿った空気の影響を受けて曇りや雨となる日が多かった。気温は平年よりかなり高いか高かった（高温）。降水量は平年よりかなり少ないか少なく、県の南部では平年並だった。日照時間は、平年並だった。

3 日は大分、武蔵、4 日は杵築、7 日は国見で「日最低気温の高い方から」の通年の 1 位の値を更新した。

1 日は竹田、2 日は蒲江、3 日は豊後高田、佐伯で「日最高気温の高い方から」の通年の 1 位の値を更新した。

3 日は蒲江で「日最低気温の高い方から」の 8 月の 1 位の値を更新した。

※大分市の旬平均気温は 30.5℃で平年よりかなり高かった。旬降水量は 4.0 ミリで平年より少なかった。旬日照時間は 74.9 時間で平年並だった。

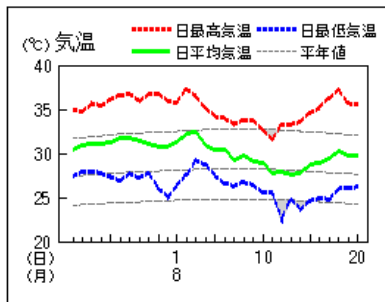
8 月中旬

天気は、高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、湿った空気や日射の影響により、曇りや雨が降る日があった。気温は、平年よりかなり高いか平年並だった。降水量は、平年よりかなり少ないか少なかった。日照時間は、平年より多いか平年並だった。

※大分市の旬平均気温は 28.8℃で平年より高かった。旬降水量は 4.0 ミリで平年より少なかった。旬日照時間は 78.2 時間で平年より多かった。

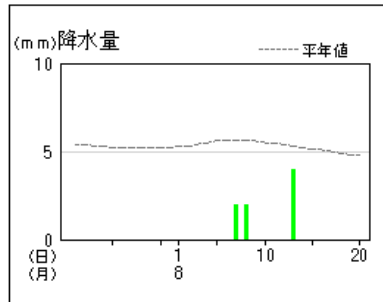
地上気象 気象経過図：2026年07月21日～2026年08月20日

大分



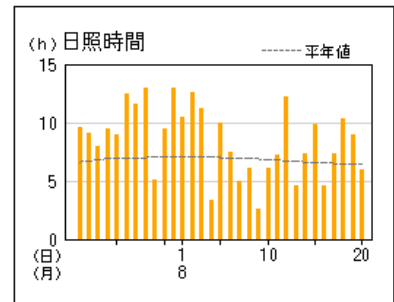
地上気象 気象経過図：2026年07月21日～2026年08月20日

大分



地上気象 気象経過図：2026年07月21日～2026年08月20日

大分



地上気象 気象経過図：2026 年 7 月 21 日～2026 年 8 月 20 日

適正防除はホームページで!!

<https://www.pref.oita.jp/site/oita-boujoshou/>

または

病虫害対策チーム

検索



【病虫害発生予察情報作成機関】

農業研究部

病虫害対策チーム

葉根菜類・茶業チーム

果樹グループ

花きグループ

地域農業振興課

安全農業班

大分県農林水産研究指導センター

農業研究部 病虫害対策チーム

〒879-7111 大分県豊後大野市三重町赤嶺 2328-8

Tel. 0974-28-2078

Fax. 0974-22-0940

大分県農林水産部地域農業振興課 安全農業班

〒870-8501 大分県大分市大手町 3-1-1

Tel. 097-506-3661

農薬は正しく安全に使いましょう!!